

ク ラ ス		受験番号	
出席番号		氏 名	

二〇一四年度
第一回 全統記述模試問題

国 語

二〇一四年五月実施

現・古・漢型 一〇〇分
現・古型 一〇〇分
【現代文型】 八〇分

試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開かず、左記の注意事項をよく読むこと。

注 意 事 項

- 一、問題冊子は26ページである。
- 二、解答用紙は別冊になっている。(解答用紙冊子表紙の注意事項を熟読すること)
- 三、本冊子に脱落や印刷不鮮明の箇所及び解答用紙の汚れ等があれば、試験監督者に申し出る。
- 四、左表のような「問題選択型」が用意されているので、志望する大学・学部・学科の出題範囲・科目にあわせて、選択型を選んで解答すること。出題範囲にあわない型を選択した場合には、志望校に対する判定が正しく出ないことがあるので注意すること。

選 択 型		問題番号
1	現代文・古文・漢文型	一 三 四
2	現代文・古文型	二 三 五
3	現代文型	三 四 五

解答すべき問題数は、現代文・古文・漢文型及び現代文・古文型はいずれも4問、現代文型が3問である。

- 五、試験開始の合図で解答用紙冊子の国語の解答用紙を切り離し、下段の所定欄に「選択型・氏名・在・卒高校名・クラス名・出席番号・受験番号」(受験票の発行を受けている場合のみ)を明確に記入すること。なお、氏名には必ずフリガナも記入のこと。
- 六、解答には、必ず黒色鉛筆を使用し、解答用紙の所定欄に記入すること。解答欄外に記入された解答部分は、採点対象外となる。
- 七、試験終了の合図で右記五、の項目を再度確認すること。



一 【共通】

次の文章を読んで、後の問に答えよ。（配点 六十点）

オフィスビルというのは基本的に不特定な主体、交換可能な主体への帰属を前提として建設されたビルディング・タイプであった。今日はA社のオフィスとして使用されるが、明日はB社のオフィスとして利用されることになるかもしれない。

交換可能な主体を対象とする建築に要請される特質とは、ニュートラルな建築表現を追求し、ニュートラルな内部空間を構築することであった。いつてみれば個々の主体の恣意的な欲望から可能な限り距離をとることが、この種の建築物に要請された。モダニズムという建築様式は、そもそもこの種の交換可能性、あるいは脱主体性に適合した建築様式として生成されたのである。

モダニズムの代表的建築家であるミース・ファン・デル・ローエはユニバーサル・スペースという空間概念を提唱したが、ユニバーサル・スペースとはどのようにてもなりうる自由なスペースであるとミースは定義した。ユニバーサルとはそういう意味である。その空間はフラットな床と天井という二枚の水平面から構成された完全に均質な空間で、その空間を利用する主体が、簡単なパーティション（間仕切）を使って自由に家具を配列することで、その空間のキャラクターや（注2）フアンクションを自由自在に作りあげていく。

物（パーティションや家具）は欲望に屈服するが、建築は欲望に屈服してはいけないというのが、ミースの唱えたユニバーサル・スペースの理念であった。ミースがユニバーサル・スペースを通じて批判しようとしていたのは、一九世紀のブルジョアジーの室内である。そこでは建築と物（商品）とがべったりと癒着し、建築が欲望に対してみじめなほどに屈服していた。

一九世紀のブルジョアジーの欲望は、その室内に投影されたと語ったのは、ヴァルター・ベンヤミンである。^(注3)そこには彼らの夢、趣味、欲望の投影された物たちが並べられ、壁や天井等の内装もまた、無数の装飾、素材、色彩で埋めつくされていた。このような状態の室内をベンヤミンは「挫折した物質」と名付けた。ここでは、建築も物もすべてが資本制内部の物の循環、連鎖から脱落し、ただ静かに死を待っているのである。なぜなら、当人以外の人々にとって、この「挫折した物質」は A でしかないからである。

もちろんブルジョアジーの室内だけが「挫折した物質」であつたわけではない。住宅という存在自体が、そもそも「挫折した物質」であるということを、^(注4)エンゲルスは別の表現を用いて述べている。彼は労働者を対象とする「持ち家政策」に対し反対を唱えた。なぜなら資本制のもとにおいて、資本家以外の階級がいかに住宅を私有したところで、それは資本とはならず、^aリジンを生み出すことはない。とすれば資本家から疎外された労働者のポジションには何ら変わりがなく、それどころか住宅を私有した労働者はローンの支払いに追われ、かつての農奴と同様に土地に縛られ、労働を強制されることになるというのである。

¹ユニバーサル・スペースは建築を「挫折」から救出するための処方箋のようなものであつた。建築は物（商品）と切斷され、永遠に挫折することなく輝き続けるのである。しかしこの処方箋はベンヤミンの指摘に対しては有効であつても、エンゲルスに対しては答えていない。

エンゲルスに答えるためにはもうひとつの処方箋²が必要であつた。そのために二〇世紀が用意した処方箋が、都市計画におけるゾーニングという考え方であつた。

ゾーニングとは一言でいえば、その場所で建設できる建物の種別とヴォリュームとをあらかじめ設定し、制限する法制度である。それ自身が資本とならない住宅のような建築物もこの法制度によって一種の資産としての価値を保障される。たとえば容積率三〇〇％³といえはその土地の上に、土地の面積の三倍までの床面積の建築が可能である。その場所の家賃

の相場とゾーニングによって定められる建設可能床面積が決まれば、土地の値段はほとんど自動的に決定可能である。一見するとゾーニング制度の目的は B であるかのように思える。しかしその裏にある思想は、土地を資産化し、その資産価値を安定化することだった。住宅もまた資産たりえる。ゆえに「挫折」しない。それがエンゲルスの問いに対する、二〇世紀流の解答であった。

ゾーニング制度は確かに様々なフエーズ^(注5)において、二〇世紀の都市を救出した。容積率制度導入以前の地価は極めて不安定な状態をヨギ^bなくされていた。一九二〇年代のニューヨーク市のバブルの原因のひとつが、容積率制の不備にあるといわれる。当時は高さ制限も容積率も不備であり、今日から考えれば信じられない話だが、敷地面積の四分の一以内の部分には、無制限に塔状建築を建てるのが可能だった。クライスラービル、エンパイアステートビルなどの高容積のスカイスクレーパー^cがその敷地の四分の一の部分に、一切の高さ制限を受けずに次々と建設された。結果、オフィスビルにボウダイ^dな空室が生じ、資産価値も賃料もトツジョ^d暴落することとなったのである。その反省からゾーニング制度が整備されていったのである。

郊外住宅においても同様であった。ゾーニング制度は、住宅建設可能な地域と、不可能地域とを定めた。郊外の「住居地域」という限定されたゾーンにのみ住宅の建設を許可し、さらにそのゾーン内での工場やオフィスビルの建設を禁止することによって、住宅の資産価値は守られたのである。所詮、戸建ての住宅は主体（建て主）への帰属が強く、オフィスビルのように、自由に借り手がつく流動性の高いマーケットは成立しにくい。とすればエンゲルスが言うようにお金を生む資本としてではなく、資産としての価値をゾーニング制度によって担保しさえすれば、物質は「挫折」から救出されうると二〇世紀の人々は考えたのである。

かくして、ユニバーサル・スペース（モダニズム建築）とゾーニングという二本の柱を支えとして、二〇世紀の都市はスタートした。しかし、この二本の柱はやがて揺らぎ始めた。その最大の原因は、二本の柱の前提としてあった資本制自

体の変容である。その変容が、やがてポストモダンリズムという建築様式として、可視化され、露見していったのである。

この揺らぎとは一言でいえば、資本と商品（資産）との境界が曖昧化したということである。古典的な資本制のもとにあっては、資本と商品は対極的な存在であり、その境界は明確であった。資本という主体が商品という客体を生産するという関係であり、両者の混じりあうことはなかった。

しかし、二〇世紀後半以降の資本制のもとで、両者の境界は極めて曖昧になり、資本自体が一つの商品としての性格を帯びはじめたのである。情報化と規制カンワ⁶とがこの変化に大きく寄与した。資本そのものが投資活動の主体ではなく客体（商品）となり、買取や合併も日常的な事件となった。客体（商品）は売れやすい顔を纏^{まと}っていないてはならない。それは資本制のもとでの商品の宿命であった。では資本という商品の顔はなんだろうか。資本の入居しているオフィスビルは、もっともわかりやすい資本の顔であった。「挫折しない物質」としてのニュートラルなデザインのみを要求されていたオフィスビルにも、個性的で売れやすい顔、欲望を喚起する顔が必要とされたのである。ポストモダン・スカイスクレーパーと呼ばれる、個性的な外装デザインを持ったオフィスビルは、まさにこの資本制の変質の産物であった。

郊外の住宅においても、同じような主体と客体の混同、転倒が起こった。国家によって定められたゾーニングが資産（商品）としての価値を保障するというのが、二〇世紀郊外のフオーミ^{（注7）}ュラであった。しかしここでも、二〇世紀後半の資本

制の変容は新たな現象を生み出した。資産価値を持つ住宅は、それを担保として容易に資本へと転化し、自ら主体としてマネーゲームへと参加しはじめたのである。土地神話によってかさ上げされた日本の住宅は、信じられないような大きさの資本へと化けてしまった。エンゲルスの警告は彼が想像もしていなかった形で完全に無効となった。

C

はもは

や消滅したように人々は信じ込み、株へ、不動産投資へと走っていった。その投資によってポストモダンリズムは加速された。住宅を担保とする資金が、数えられないほどの本数のポストモダン・スカイスクレーパーを生み出したのである。

(注) 1 ミース・ファン・デル・ローエ……ドイツ出身の建築家(一八八六―一九六九)。

2 ファンクシオン……機能・作用、の意。

3 ヴアルター・ベンヤミン……ドイツの批評家(一八九二―一九四〇)。

4 エンゲルス……フリードリッヒ・エンゲルス。ドイツの思想家・革命家(一八二〇―一八九五)。

5 フェーズ……段階・様相、の意。

6 スカイスクレーパー……高層建築・摩天楼、の意。

7 フォーミュラ……方式・定式、の意。

問一 傍線部a～eのカタカナを漢字に直せ。

問二 空欄

A

C

び、記号で答えよ。

A ア 想い出に繋がる過去の残骸 イ 憧れに終わりがねない品々

ウ 悪徳の生み出した金品 エ 気色の悪い汚物 オ 嫉妬と羨望の的

B ア 労働者の保護 イ 環境の保全 ウ 資本制の解体

エ 土地の国有化 オ 地価の抑制

C ア バブルとその崩壊の記憶 イ 資産と商品との境界

ウ 主体と客体の混同 エ モダンとポストモダンの差異

オ 労働者と資本家との分節

に入れるのに最も適当な語句を、次の各群のA～オの中からそれぞれ一つずつ選

問三 傍線部1「ユニバーサル・スペースは建築を『挫折』から救出するための処方箋のようなものであった」とあるが、「建築を『挫折』から救出する」とはどういうことか。「ユニバーサル・スペース」が「建築を『挫折』から救出」しうる理由を含めて、九十字以内（句読点等を含む）で説明せよ。

問四 傍線部2「もうひとつの処方箋」とはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 労働者の手に入れた住宅が市場における価値を持たないという事態を回避するために、土地を資産化し、その価値を安定させることを目指し、建物の種類と容積を地域ごとに規定する法制度を整備すること。

イ 労働者が自分の家を持っても、かえって労働が過酷になるだけだという論理を打破するために、土地を有効な資本として運用できるよう、地域に建造しうる建物の種類と容積を制限する法制度を整備すること。

ウ 労働者に家を持たせようとする政策を批判しているエンゲルスに対抗し、持ち家の魅力を高めるために、個々の地域に建造できる建物の種類と容積を限定し、土地を資産として認める法制度を整備すること。

エ 住宅を所有した労働者がローンのために労働を強制されるという状態を招来させないために、土地の資本化という思想を前提として、その土地に建造できる建物の種類を限定する法制度を整備すること。

オ 自分の家を持ったとしてもそれは何も生み出さないのでないかという労働者の不安を払拭するために、土地の資産化を目的として、その土地に建てられる建築物の種類と容積を設定する法制度を整備すること。

問五 傍線部3「資本と商品（資産）との境界が曖昧化した」とはどういうことか。建築に即して、六十字以内（句読点等を含む）で説明せよ。

問六 本文の内容と合致するものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 資本制という社会制度は、いつどこであれ、どのような存在をも否応なく商品化してしまうが、これはこの制度の有する宿命的な性格だと言える。

イ 一九世紀における新興階級や資本家に対しての批判は、二〇世紀の庶民生活を豊かなものにしたが、社会自体を正しい方向に導いたとは言えない。

ウ 二〇世紀後半にはポストモダニズムが全盛となったが、建築が社会の変化の影響を受けるものである以上、今後の建築のあり方も流動的であると言える。

エ 一九世紀のブルジョアジーの欲望は邸宅の趣味に反映されたが、そうした彼らの恣意的な営為は、結果的に建築の進歩を遅らせるものとなった。

オ モダニズムがポストモダニズムにとって代わられたのは、オフィスビルに入る会社を主体に考え、労働者の環境を改善しようとしなかったこととも関連がある。

【共通】

次の文章を読んで、後の問に答えよ。（配点 四十点）

ここ数年来、日本社会の「すぐに白黒つけたがる」傾向は加速度的に強まっている気がする。

官僚の不祥事が起これば、官僚全員が悪人であるかのように官僚たたきがなされる。いうまでもなく官僚にだっていろんな人がいるのに、無理やり一色に染め上げたがる。

どうやら、いまの日本社会にあつては、「単純に割りきれないこと」「白黒つけられないこと」の存在が、人びとをひどくいらだたせるらしい。そのいらだちの源は何かと考えるに、現代人の生活が複雑な要因や関係に絡みつかれ、すぐには見通せないということが、背景要因になっているのではないかとおもう。

社会のシステムじたいが錯綜してきて、生き方も多様化しているし、インターネットやテレビなどから大量の情報とさまざまな意見が流れてくる。また、グローバル化の進展によつて、いまやスーパーに並ぶ食べ物一つとっても、その背後には交易関係や国際政治が幾重にもからみあっている。そのように複雑化した現代社会にあつては、「これはこうするのが正しい」と一口に言いきることが難しくなっている。

そうした社会に生きていると、「複雑なものを単純化したい」という欲求、あるいは「悪いのは○○だ」「原因はこれだ」と言いきりたいという願望が、どんどんつのつてくる。つまり、「言いきること、決めつけることでスッキリしたい」という願望である。その願望をつのらせた悪しき典型が、クレイマー¹と呼ばれる人たちだ。

もう一重立ち入って考えるなら、複雑化した現代社会は人びとが「たがいに世話しあう力」を喪失した社会である、ということも背景にあるようにおもう。近代以前の社会では、人びとがたがいのいのちの世話をしあっていた。お腹が痛んだら薬草を煎^{せん}じて飲ませたり、もめごとがあれば地域の顔役に調停を頼んだり……。そして「世話をする務め」をほとん

どすべて外部のプロや公共サービスに委託するようになったのが現代社会である。おかげでわたしたちは安心で快適な生活を楽しんでいるわけだが、そのことが一方では「たがいに世話しあう力」を人びとから奪い去ってしまった。

出産の手助けも、傷の手当ても、看護も介護も看取りも、近所とのめごとの解決も、じぶんたちの手には余る。一方で、公的なサービスには税金を、民間のサービスには料金をきちつと払っている。だから、サービスが劣化したり滞ったりしたとき、そういう機関に「文句を言う」ことしかできなくなっているのだ。

多くの日本人が「すぐに白黒つけたがる」単純思考にはまってしまった時代だからこそ、わたしたちはその逆方向に心を鍛えなおす必要がある。

「噛みきれない想い」に潜む淀みよどをなおも見分ける力——それが知性の力であろうし、その力はこれからの時代、ますます必要になってくる。なぜなら、今後の日本社会は「多文化共生の社会」にならざるをえないからである。

コンビニのレジ係として中国の若者が働いていたり、介護の現場にフィリピン人が増えてきたりといったかたちで日本社会にはすでに外国人労働者も目に見えて増えてきている。少子高齢化が急速に進む日本にあって、その数は今後増えてゆく一方だろう。そうした人たちと一緒に暮らしてゆくときに、

X

という難題に、わた

したちは取り組んでゆかねばならない。そして、白黒で割りきる思考法では、異なる文化的背景をもつ人たちとのコミュニケーションは成り立たない。白とも黒とも割りきれないグレイゾーンを受け入れ、その淀みをていねいに仕分けていくことが、多文化共生社会の礎いすとなる。

そして、「多文化共生」とは外国人との共生にかぎったことではない。たとえば、現代においては、さまざまな専門家の知見はきわめて先進化し、細分化されているため、専門家と一般市民の間には「異文化」といってよいほどの懸隔けんかくがある。医療の問題、地域環境問題、食の安全の問題など、どれをとっても、最先端の専門家の知見は、素人が聞きかじっただけではわからないほど高度化している。だからこそ、専門家と非専門家のコミュニケーションも、じつは「多文化共

生」の課題の一つなのである。

そのために不可欠なのは、対話である。ただし、それは「ディベート」ではなく「ダイアログ」としての対話だ。

² ディベートとダイアログの違いについて、平田オリザさんが、大要次のようにわかりやすく教えてくださったことがある。

「ディベート（討論）においては、対話の前と後でじぶんの考えが変わったら負けだ。逆にダイアログでは、対話の前と後でじぶんの考え方・感じ方が少しも変わっていなかったら、対話をした意味がない」と。

すべてを白と黒で割りきり、正しいことと間違ったことを峻別（しんべつ）しなければ気が済まない思考スタイルの持ち主は、異なる文化や思想をもつ相手とディベートはできても、ダイアログはできないだろう。

ただし、ここでいう「ダイアログを通じて考えを変える」とは、無節操に白説を曲げることではない。じぶんの考えを絶対視せず、別の視点・他者の視点からも考える複眼的な柔軟さをもつこと、ひいては、物ごとの「両義性」をわきまえて、一つの単純な見方に凝り固まらないことである。

そして、これからの多文化共生社会を生きてゆくうえで、ダイアログとしての対話をする能力は必須の力になってゆくだろう。その能力をそなえた人こそ、これからの時代の「熟成した市民」なのである。

では、真の対話力を鍛えるために何をすればよいか。抽象的な言い方になるが、「聴く力」と「待つ力」を鍛えることから始めるべきだとわたしは考えている。

いまの社会の評価制度においては、人の話を聴くこと、人の気づきを待つことは、能力として評価されない。しかし本来、「聴く」ことも「待つ」ことも、広義のホスピタリティ（人をもてなすこと）の中核をなす大切な営みであるはずだ。それは一言でいえば、（他者に）「Y」ということだ。

「聴く」と「待つ」ことが正当に評価され、重んじられるようになったとき、人びとの対話力も鍛えられ、「噛みき

れない想い」をじっくり吟味する豊かな心も育まれてゆくだろう。

（鷺田清一『パラレルな知性』）

問一 傍線部1「クレーマー」とあるが、このような人びとが出現した背景はどのようなことだと筆者は考えているか。

その説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 現代の日本社会では、社会のシステムが錯綜し大量の情報や意見が流入してくることで、精神の安定が得られなくなっているということ。

イ 「単純に割りきれないこと」への明確な回答に追われるだけでなく、グローバル化の進展によって正しさの定義が変化してしまったということ。

ウ 社会のシステムや国同士の交流のあり方が複雑化した現代社会では、個々の物事が正しいか否かを一口で言い切ることが難しくなっているということ。

エ 一義的に見通せない複雑な社会のなかで、たがいの世話を外部のサービス機関に対価を支払って委託するようになったこと。

オ たがいの世話を外部の機関に委託する際にかかる費用とサービスの質との釣り合いが取れていない状況が、年々深刻化しているということ。

問二 空欄

X

Y

記号で答えよ。

を補うのに最も適当なものを、次の各群のA～Oの中からそれぞれ一つずつ選び、

A 異様なものを異質なまま認めて共存してゆく

I 異様なものの異様性をさらに際立たせる

U 異様なものにあえて触れずにそつとしておく

E 異様なものに自らをできるだけ適合させる

O 異様なものを教化して自らに同化させる

A 気づきをあたえる

I 話題をしめす

U 時間をあげる

E 発言をうながす

O 評価をまかせる

問三 傍線部2「デイベートとダイアログの違い」とあるが、その「違い」を九十字以内（句読点等を含む）で説明せよ。

問四 本文の内容と合致するものを、次のア～カの中から二つ選び、記号で答えよ。

ア 近年、日本社会に「すぐに白黒つけたがる」傾向が加速度的に強まったが、その結果、多様であった人びとの生き方までもが徐々に画一化されつつある。

イ 官僚の不祥事が起こると官僚全員が悪人であるかのように官僚たたきがなされることの原因は、現代日本社会の生活が複雑化した点にもあると言える。

ウ 異なる文化的背景を持つ人びととのコミュニケーションを円滑にしていくために、相互間に横たわるグレイゾーンをていねいに説明していくことが必要である。

エ 「多文化共生」とは外国人との共生にかぎったことではなく、むしろ専門家と非専門家のコミュニケーションのほうが「多文化共生」のより大きな課題である。

オ すべてのを白と黒で割りきり、正誤を峻別しなければ気が済まない思考スタイルの持ち主は異なる思想をもつ相手とダイベートする際に不都合が生じる。

カ 人の話を聴くことや人の気持ちを待つことができる能力が正当に評価されない状況は、現代の日本社会の「すぐに白黒つけたがる」傾向を助長していると言える。

三

現・古・漢型

現・古型

次の文章は『源平盛衰記』の一節である。源平の合戦に敗れ、流罪を言い渡されていた中納言律師忠快のもとに、鎌倉に招きたいという源頼朝（二位殿）の書状が、豪勢な迎えとともに届けられた。忠快は、わけがわからないまま、迎えるの興に乗って出立し、鎌倉に行き着く。これを読んで、後の問に答えよ。（配点 五十点）

すでに鎌倉に下着して、かくと申し入れたければ、二位殿、急ぎ見参してのたまひけるは、「まづ御下向よろこび存じ侍り。そもそも、御本尊に地藏菩薩や安置し給へる」と問はれけり。律師、「さること候ふ」と答ふ。「その本尊、片手や折れ給へる」とのたまへば、「御手の折れさせ給へるとは覚えす。久しく納め奉り、はるかに拝み奉りて、すなはちこれに持ちて奉れり」とて、錦の御舍利袋より、紫檀をもつて造りて金銀をもつて飾りたる厨子を取り出だして、御戸を開いて拝ませ奉り給へば、右に黄金の錫杖を突き、左に如意宝珠を持ち給へるが、腕首折れかかりてぞおはしける。

二位殿、これを拝み奉り、はらはらと涙を流し、五体を地に投げ入れし給ふ。因幡守弘基を召して、「嚴重殊勝の御仏、

拝み給へ」と仰せられければ、弘基同じく拝をなすところに、二位殿、物語にのたまはく、「往にしころ、この靈夢をかうむることありき。錫杖突きたる貴僧の容貌うつくしきが、わが枕上に立ち給ひて、平家門脇中納言の子息律師忠快と申すをば、この僧に免し給へかし。年ごろ深くわれをあひ頼める僧に侍り。不便に覚ゆと仰せられしを、夢の心地に、この御房は地藏など心得たりしかば、承り候ひぬと申すを聞き給ひ、返す返す本意なりとて、御飾りつくろはせ給ふが、

の御手の折れ給へるを、よに痛はしげにせさせ給ふと見奉りし間に、あの御手はいかにと問ひ申せば、西海の舟にて忠快を助け乗せんとせしときに、左の手をあやまりてと仰すと示現をかうむる。末代なれども、かやうに威験のおはしましける御信心のほどこそ、めでたくたふとけれ」とのたまへば、弘基も感涙を流して、「ありがたき御ことにこそ」と申しけり。

律師のたまひけるは、「都を出でて三年、宿定まらぬ旅なれば、心静かに相好を拝み奉るひまも候はず。されば、御手の

A

折れ給へるも、いかでか存じ候ふべき。御尋ねにつきて候はずば、何としてかさやうに御渡り候ふべきと、よに不審に候ひつるに、御夢に思ひ合はすること候ふ。先帝^(注4)大宰府におはしましとき、緒方三郎維義^{をがた}が三万余騎にて攻め来りしに、主上をはじめ奉り、あわてさわぎ舟に乗り候ひしに、あしぎまに乗りてすでに水に入りぬべく侍りしを、下僧^{しやうそう}のひとり来りて助け乗せて後に、忠快は舟にあり、下僧は陸^くに立ちて、

B

 手をもつて

C

 の腕を抱へたりしを、あれはいかにと問へば、あしぎまに参りて手を損じて候へども、⁵ ことかけ候はじと申せしを、汝は誰人の供ぞと尋ねしかども、返事を聞くこともなかりき。今の御夢想を承るに、はやこれぞ地藏の御助けにて」と、語りも果てず、衣の袖を絞りけり。二位殿も、いとど⁶ 帰依^{きえ}の涙を流し給ふ。^(注5) 二位家の北の方も、簾中^{れんちゆう}にしてこれを聞き、拝み給ふ。すなはち、仏師を召され、御手をつぎ奉る。

(注) 1 厨子……向開きの扉がついた、仏像などを安置する入れ物。

2 腕首……手首のこと。

3 嚴重殊勝……靈驗^{れいげん}がとくにあらたかであるさま。

4 先帝……安德天皇。平家一門とともに都落ちした。後出の「主上」も同じ。

5 二位家の北の方……源頼朝の正妻、北条政子のこと。

問一 波線部 a i c の「せ」の文法的説明として正しいものを、次のア～カの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

ア サ行変格活用動詞「す」の未然形

イ 過去の助動詞「き」の未然形

ウ 使役の助動詞「す」の未然形

エ 使役の助動詞「す」の連用形

オ 尊敬の助動詞「す」の未然形

カ 尊敬の助動詞「す」の連用形

問二 傍線部 1 「二位殿、物語にのたまはく」以下に語られる体験談には、二位殿の夢の中に現れたものの発言を引用した箇所が三箇所ある。その最初と最後の二字（句読点等は含まない）をそれぞれ記せ。なお、発言箇所はすべて五文字以上である。

問三 傍線部 2 「年ごろ、6 「いとど」の意味をそれぞれ記せ。

問四 傍線部 3 「かやうに威験のおはしましける御信心のほどこそ、めでたくたふとけれ」とはどういうことか。本文に即して具体的に七十字以内（句読点等を含む）で説明せよ。

問五 傍線部4「いかでか存じ候ふべき」、5「ことかけ候はじ」の現代語訳として最も適当なものを、次の各群のアイオの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

- 4
- ア どうして気づき申しあげることができましようか
- イ どうにかして気づきなざりたかったでしょうに
- ウ どうして気づいていただくことができるでしょうか
- エ どうにかしてお気づきになってほしかったでしょうに
- オ どうして気づいてさしあげることができなかったのか

- 5
- ア 不自由はございますまい
- イ 気にしなくてもいいのです
- ウ もう何もおっしゃいますな
- エ 咎めるつもりはございません
- オ 他になす術がなかったのです

問六 二重傍線部X「この僧」、Y「われをあひ頼める僧」、Z「下僧」が指し示すものとして最も適当なものを、次のアイオの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。ただし、同じ記号を何度用いてもよい。

- ア 二位殿 イ 中納言律師忠快 ウ 地藏菩薩 エ 因幡守弘基 オ 先帝

問七 空欄 A C には、「右」または「左」のいずれかの語が入る。空欄に入れるのに適当な語を、それぞれ記せ。

四

現・古・漢型

次の文章は、官界を引退して故郷で悠々自適の暮らしをしていた李心台と、その身の回りの世話をしていた白巧児という農家の婦人をめぐる話である。これを読んで、後の問に答えよ。（設問の都合で、返り点・送り仮名を省いたところがあ
る。）（配点 五十点）

無頼者流遂疑李富厚、謀劫之。巧児告李、李笑之、慢不為備。一夕、李方秉燭讀、有数盜破門入、執李問金所在。李戰慄不能語。盜持刀加頸嚇之。正爭持間、忽一人自梁上躍下、拳棍猛擊賊。賊不勝、抱頭而遁。李驚定、審視之、則巧児也。問何以能之。巧児曰、「此非旦夕之功。吾夫嘗耕崖下。吾往餽膳時、欲繞道去、則膳冷。故嘗就捷徑從崖躍下。初亦甚不易、後則不覺苦矣。」李曰、「子今日何由知盜之將至。」巧児曰、「余待之数日矣。」李謝曰、「微子、吾幾不保。今而後請毋自儕於僕也。」巧児謝不敢、仍尊之如初。

（徐珂『清稗類鈔』）

(注)

○無頼者流——ならず者たち。

○富厚——財産があつて富裕なさま。

○劫——強奪する。

○戰慄——恐れおののく。

○争持——互いに争う。

○梁——屋根を支える大きな横木。

○棍——棒。

○膳——食事。

○捷径——近道。

○儕於僕——召使いのような態度を取る。

問一 傍線部イ「不_レ能」、ロ「不_レ勝」の読みを、送り仮名も含めて平仮名ばかりで答えよ。

問二 傍線部 a「忽」、b「謝」の意味を答えよ。

問三 傍線部 1「問何以能_レ之」を書き下し文に改めよ。

問四 傍線部2「此非旦夕之功」とはどういう意味か。最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 私が泥棒を撃退してあなたを救うことができたのは、日頃から鍛錬しているからではありません。
イ 私が命がけで泥棒に立ち向かったのは、あなたから褒美をいただきましたからではありません。
ウ 高い所から飛び降りることができる私の能力は、短期間の努力で身につけたものではありません。
エ 天井から飛び降りて泥棒を攻撃した私の行動は、冷静な判断からなされたものではありません。
オ あなたの家に侵入した泥棒を追い払った私の行いは、称賛に値するほどのことではありません。

問五 傍線部3「子今日何由知盗之将至」は「子今日何に由りてか盗の將に至らんとするを知る」と読む。この読み方に従って、解答欄の原文に返り点を施せ。（送り仮名は不要。）

問六 傍線部4「微子、吾幾不保」を現代語訳せよ。

問七 二重傍線部「一人自梁上躍下」とあるが、「一人」はなぜこのようなことができたのか。六十字以内（句読点等を含む）で説明せよ。

五

現・古型

【現代文型】

次の文章を読んで、後の問に答えよ。（配点 五十点）

¹核家族や独居世帯が多くなっていると言われて久しいが、それは読書のありかたにも影響する。たとえば家族が十人いる家では、人は自分が選んだ以外の本を読むことが多くなるが、一人暮らしでは、家で読むのは原則的に自分の本だけになる。前者の場合、読書は受け身の行為としての性格が強くなる。²読みたいものを買って読むのではなく、あるものを偶然読む行為になるからだ。

昭和後期の都市部の家としては、³私の家はかなりの「大家族」だった。祖父が同族企業を営み、そこで父の兄弟が全員働いていた。親族は毎日、うちの前の駐車場に集まっては、会社名の入ったライトバンに空き段ボールを積み、離れたところにある自分たち経営のスーパーマーケットに買い出しに出かけた。子供の私もいとこたちと一緒に車に乗った。家に残る誰かが「オーライ、オーライ」と言い、運転手になっている誰かが後ろの窓を見ながら発車する。いつも決まったところでがくと片輪が車道に落ち、斜めになった車内で一つ年上のいとこが私の上に乗りかかる。面白くて毎回私は笑う。すぐもう一度がくんとなって車内がまっすぐに戻り、車はすると道路に滑り出す。^a臨海の工場地帯に向かう家の前の道は広く、すぐそばで渦巻くように交わっていた。

毎日のその行事の目的は、自分たちが食べる分以外に大量の食品を購^b入し、会社の寮を兼ねている伯父の家に届けることにあつた。しかし私には別の目的があつた。食堂に大人たちが食品を運んでいる間、同じ建物の一角にあるかなり年上のいとこの部屋に侵入して、いとこの本棚の漫画を勝手に読むのだ。

人間がまわりにわらわらとたくさんいると、一人の子供に対する監視の目が弱くなる。私はいつも誰かの私的空間に勝手に入っては、彼らが個人的に集めたいろいろな印刷物を適当に読んでいた。大人がやったらストーカーのような行為だ。

人によっては対象がレコードだったりするのかもしれないが、私の場合は本や漫画だった。別の年上のいとこは、半年に一度くらい、購読していた少女漫画雑誌を山のように積み上げてひもでしばり、別の親族の家の物置兼自転車置き場に出していた。ちり紙交換などに収集してもらったのだと思う。私は自分の胸くらいの高きがあるそれを持ち帰って読んでいた。ちり紙交換のために置いていたのだとしたら、一種の窃盗かもしれない。少なくとも、今自分がやられたらけっこう気持ち悪い行為だと思うのだが、人が多くてあまり気にされなかったのか、誰からも苦情は出なかった。

家の中にも誰かの本がいろいろ置いてあった。祖母がやっていた家政婦紹介所には家政婦さんが読む薄い新聞広報誌や月刊PHPが置いてあった。一時期私はPHPをひいきにしていた。何かがおもしろかったのだろう。田舎から出てきて会社を作った祖父は四角い月刊誌を定期購読し、六〇年代に発行された世界文学全集と日本文学全集を私が生まれる前に購入していた。そして家を新築する際に二階の絨毯敷きの部屋に全集のための作り付けの棚を作った。⁴ しかしまったく読まなかったらしい。買ってから十五年くらい後に私が開いた多くの巻から、「今初めて開けられました」という証拠が出てきた。箱のビニールカバーが隣同士でべつとりくっついて、壁の一部のようになった箇所もあった。はがすには家の一部を壊すような苦勞が必要で、出すのをあきらめた巻もある。

一階の壁面にはスチールの棚が三台並べて置いてあり、男のいとこが学校帰りに読んでそのまま置いていったまんが日本史だとか、祖父が自分の興味で買った読み物が並んでいた。『親鸞』^{しんらん}などが多かったが、中に一冊『不良老年のすすめ』という本があって、若い女性に酒を飲ませてどうこうしてみよう、老人だから警戒されなくて意外とうまくいく、といったことがユーモラスに書かれていた。祖父は運慶が作った阿形咩形^{あぎようんぎよう}のような顔の人で、年上のいとこたちには厳しかったが、私はあまり厳しくされた覚えはない。全集の欠けた巻を買ってきくとお金を渡されるなど、気を許されている気がした。今思うに、彼が買った文学全集を私が開けたり、彼が相撲中継を見ている横で私が『不良老年のすすめ』を読んだりしていたからではないかと思う。買っても読まなかった文学全集や、本人と結びつかない『不良老年のすすめ』は、

彼が心の裏側に持っている本棚の本だった。普段は本人も忘れていた本を私が読むのを見て、祖父は自分の中の忘れた部分が下の世代に受け入れられていると感じて嬉しかったのではないか。

祖父母も亡くなり、会社もなくなり、当時の家の構成員は、三十年くらいかけてほぼゼロになった。家族が減ると、その辺に落ちている本をなんとなく読むという行動が減る。自分の好きなものだけ買ったり図書館で借りたりして読む。それは最初楽しいが、けっこう退屈だとだんだん思うようになった。能動的な読書では、本しか読むものがない。でも誰かの本を勝手に読む時、私は本を所有者や本棚、場所ごと読んでいた。私にとつての読書の楽しみは、その部分にけっこうあったのだ。

受動的な読書が好きだ。そして、受動的な読み方をする時に、面白く読める本が好きだ。なぜなら、能動的に、その本をぜひ読もうと思った人だけが楽しく読める本は、その内容に興味を持たない人にわかってもらう必要はないという文章で書かれているが、近くにあったからたまたま読んだような読者が面白いと思う本は、そうではないからだ。家族が減り、受動的な読書の機会が減った現在では、そうした書き方はあまりはやらないのかもしれない。みんな専門的か、そうでない場合は何も読む必要がないほど簡単だ。中間があまりない。

数年前から評論家という肩書きで働くようになった。気がついたのだが、仕事のために人の作品を読むことは、大家族の中で他人の本を読むことに似ている。仕事することは能動的だが、対象になる本とは巡り合わせの部分が多く、本の選択についてはかなり受動的だからである。仕事用の本を読む時、私は、年上のいとこや祖父の本棚の前に座っていた時と似たものを感じる。どうしても必要で買ったわけではないが縁があって私の前にある。そこにあるから読んでいる。そういう状況で面白い本こそが本当に面白い。そう思って仕事をしている。

今回『スリリングな女たち』という本を出すことになった。私が面白いと思った女性作家についての評論集になっている。この本のタイトルを、私はもっぱら受動的な読書をしてきた子供時代の記憶からつけた。誰かが買ってたまたま家に

あり、偶然読んだ子供の私を魅了した、永井路子の『歴史をさがせた女たち』からつけたのである。そこからタイトルをつけた理由は二つある。まず『歴史をさがせた女たち』の中に書かれ、子供の私を啞然とさせた、カテリーナ・スフォルツァや則天武后といった女たちの大胆さが、金原ひとみや綿矢りさなど、対象として取り上げた六人の若い日本人女性の強さと重なると思った。私はこの本を、日本の文学史をさがせている若い女たちの記録にしたいと思った。

しかしもっと大きい理由がある。『歴史をさがせた女たち』が私を魅了したように、私は、誰かが私の文章を家に持ち帰ってその辺に置いた時に、その人ではなくまたまた手に取って読んだその家の子供などが、うわ面白いな、こんなのあるんだ、と思う評論を目指したかった。努力の結果、きつとそんな本になったはずだと信じている。しかしこればかりは自分で確かめられない。そこで、本を買った人が、家族や子供の目につくところにこの本を放置してくれれば、そのことが確認できるのだが、と、一人目が購入するのも分らないうちから思ったりしている。一家に一冊とよく人が言うのは、そういう意味だったのかと、発見したりしている。

(田中弥生「受け身の読書」)

問一 二重傍線部a～cの漢字の訓読みを、解答欄の形式に合わせて、ひらがなで書け。

問二 傍線部1「核家族や独居世帯が多くなっている」とあるが、そうした状況を受けて本の書き方はどのようなものになったのか。それを示す一文を抜き出し、その最初の五字(句読点等を含む)を書け。

問三 傍線部2「読みたいものを買って読む」とあるが、そうした読書を筆者はどのようなものと捉えているか。その説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 自分の興味関心に基づいて好きな書物だけ買って読むと、そうした体験を通じて自分の視野が狭くなり、それが固定化されてしまうということ。

イ 自分の興味関心に基づいて好きな書物だけ買って読むと、他人との協調性を失ってしまい、他人との社会的な関係を見失いがちになってしまうということ。

ウ 自分の興味関心に基づいて好きな書物だけ買って読むと、世代を超えて継承されてきた家族の感受性をうまく引き継ぐことができなくなってしまうということ。

エ 自分の興味関心に基づいて好きな書物だけ買って読むと、関心が書物の内容のみに向かってしまい、退屈ささえも感じるようになるということ。

オ 自分の興味関心に基づいて好きな書物だけ買って読むと、書物の世界という観念にのみ心を向けてしまい、現実感覚をうまく持てなくなってしまうということ。

問四 傍線部3「私の家はかなりの『大家族』だった」とあるが、こうした状況下で「私」はどのような読書を楽しんでいたのか。七十字以内（句読点等を含む）で説明せよ。

問五 傍線部4「しかしまったく読まなかったらしい」とあるが、そうした祖父の「読まなかった」本のことを筆者はどのように表現しているのか。それを示した箇所を十一字以上十五字以内（句読点等を含む）で抜き出して書け。

問六 本文の内容と合致するものを、次のア～カの中から二つ選び、記号で答えよ。

ア 日本の社会や家族構成がどれほど変化しようとも、書物に対する真摯な読み方は祖父から孫へと連綿と続いていくものである。

イ 評論家になった「私」が仕事として人の書物を読むという能動的な活動の中にも、受動的な側面がある。

ウ 読みたい本のためにいとこの部屋に勝手に侵入することができたのも、子供への監視がゆるい大家族のおかげであつた。

エ 世代の違いによって人々の読書の仕方は大きく違い、その違いが書物の書かれ方に影響を与えてしまうと考えられる。

オ 自分の書いた書物の内容ばかりか書名にまでも幼い頃に読んだ書物の影響が表れるように、筆者にとって子供時代の経験は重要であつた。

カ 人間がたくさんいるという子供時代は一人一人に対する監視がゆるく、何でも自由になつたので、読んではいらない書物までも読むことができた。

問七 文中の波線部の「金原ひとみ」「綿矢りさ」は、ともに芥川賞を受賞した作家であるが、芥川龍之介の作品を、次の

ア～カの中から二つ選び、記号で答えよ。

ア 鹵車 イ 機械 ウ 雪国 エ 和解 オ 飼育 カ 河童

